



九
示
修
子
氏

刊 5
1979
8



1979
8

茂山集秋中目錄

鷓鴣 鴈 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣

鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣



司石
放生舎

駒込
仁者亭

毘山卷第九

鶏

秋部

母を何ちりくといくと啼鶏
野をうさつ木懐くとい啼鶏
尾の人母勢もわさふ列り
尾としんはくといとちふと鶏
粘乃敷をくといとけらる鶏
西の東をいといとけ地のうと鶏

るけを鳴きまの入江乃鶉米

あり都とむけの鶉も尾長

く幾都をといひあけのかと鶉米

くう梨の葉花ゆさる鶉

床座をれ建あうさといふと鶉

さあけらといやさらさうの鶉

あふまの祖父もさといふ鶉

中風やじと啼中風やわの鶉

我と深くまらわ夜たの鶉

うう夜さおもかひそり深

蘭の野おさそと啼や鶉也

本北道の宿とて

あともくひけ鶉目の松七板

一ふのあすり尾さうぬらふ

引都の秋の葉るくうた尾

秋乃目や折場てハ秋うた尾

鶉米

尾長

か

鶉

梨

鶉

日

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

さきつらり〜鶉や敷の
うらげ〜ゆくや深き此

日月

田嶋

さ〜あの大まや人の着る如
町ら〜い〜い〜い〜い〜い
そ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

心慮

さ〜い〜い〜い

田のち此鳥はさ〜あ〜あ〜あ
都鳥と鶉もさ〜あ〜あ〜あ
鶉乃鳥の法何と百もか〜あ

良和
意
松坂
加任

一田宗乃寺や〜

看經をさ〜あ〜あ〜あ〜あ
看經の志事の昆沙門へ〜あ
さ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

本我
貞利
梅盛

鶉

蘇一云居とてい出あへりし年の勢
 鷗の目とぬをかくはくわあは
 ぬとれく鷗の鼻とく目落は
 鷗とくしとく落ふ二定いおそあ
 い神りとに合せとく梅ふ小あふ
 又字あさ入鷗やあひのを勢
 梅盛
 正武
 未得

鷗吹

ままうして吹やそのま鷗のい
 正武

志とくくい年より勢の鷗の
 鷗を枯のちあ舞羽のあくの勢
 勝在

鴈

夕霧あや舟の尾やあす勢
 月の舟は輝あるれく天津鴈
 かりまゝあかり海とて射る矢根

編やうて

田原とこけりあるとと勢

らんかんの中ゆるりや着此鳥
そふ新お其まう鳥此らの子系
かりりやおお道乃はるひ砂
るるの縁の翅此もかんや管此札
鴉ふかりや包一てよまにほめ
そふ鳥や新すらありーゆにに
よの門ーる皮肉骨あつ鳥を系
子業そし一毛とあつる鳥や虎

穀妙りくそふ鷹金や子系
あまこいれこりや同封字天津
らんかりそまのまてふあつ月
鳥と好もやまの字をれま
鳥ふふるまふま字をん
新字の粘の鳥そふ天津鷹
字やふふうまこ計の勢百
何時そまはるかんふらり

田舎ら
西

徳本つり渡りさう海

江守 多念

くまのりも持ふ田

吉田 友念

そこのあはれはくや

季英

百萬をわすれりこ

良和

下河原

つり糸やまの秋

大坂 安

うしろを替りしそ

江守 久直

かき移りてゆく

保志

白鳥のたじま

江守 之晴

子親をくなく

伊豆 正質

雑と目かけ地

富 元清

天津鷹給

季英

野うさぎ

伊豆 正質

鳥子

井上 正和

矢てい

大坂 之与

板本

大坂 貞好

白雲白鳥天上よりや天津彦

純粋 三白

月母鳥の敷百それ必そり外

純粋

旅鷹とそと旅やふ斗の星月

純粋

この月の新ゆかりもそりさか

純粋

八羽母いまたの心此ら乃計

純粋

鷹を鳩もくひつ汁の新輝

純粋

いもかりとかり渡り橋師水

純粋

羽ら笑さそをさる鷹金や下るあ

純粋

かりこの利是の流ぬか草介

純粋

鷹金やるささといそ北母そり

純粋

るまの心あくるれやままは

純粋

鷹金の枯風樂のあそちりね

長靴丸

まをいらく流ぬかそんか

同

まを流ぬか流ぬかそんか

同

ねらぬかまやあひれ天津彦

同

志所流ぬかそんか

同

月の結とひける母似るる様
ぬきまふらうさしね鷹子外 同 月

わらわめく初宿の振まひ
母多かほくちりてけし

らぬとまうまじりてし
乃のけしゆきも涙ぬ未だ未だ 同

東と西も笑まふも

河門流はみらるの時

乃全色をぬかたけや物言 同

秋燕

やまのつれづれはさきも人も燕は 一考

釣舟はのてきひこころあつて物 長久

色鳥

老の結よりさしむるも中法
ふくの翅やぬ八の甲午か
猿原母あつた押さる自由外

ちをもちらぬ此老や四十の

四十のちをもちまといぬる

をのつれ目のちをもちぬる

色鳥もすむ夕顔乃小家

山くらくちんちんちんちん

鳩の枝とれじ時分の四十雀

軍のちをもちまといぬる

軍のちをもちまといぬる

けらるる軍のちをもちぬる

五十のちをもちまといぬる

夏に其志をもちまといぬる

色鳥のちをもちまといぬる

翻書と出入はあつち四十の

まのちをもちまといぬる

終母のちをもちまといぬる

色鳥のちをもちまといぬる

和

信

如

政

未

同

貞

の

舎

如

主

此

月

月

こ

貞宜

綱

也

か

ち

計

兵

外

はくこあを悦へともやを何 日

枯鷲

看るる色はくもてかみの小鷲
わらふまはくともや約るふこはりぬ
殺生とまらひはくもり小鷲
目のくらき鏡とまらひ小鷲
鳥とまはくはくやなかりはく小鷲
はくまはくゆへい小鷲はくまはく
一治

平と結ふふふと人揚ふ小鷲
小鷲とやまらひゆへい小鷲
ともや鷲やゆへいけ出家小伏
ゆへい鷲や押はくふさまふ小伏
鷲はくはくせはくはく杖や料の杖
成言
保友
心為
毒
長蛇

枯蝶

わらふふや為花の袖の紋そあ
枯風のうつくさや毒ふ胡蝶
長蛇

虫

九土

啼虫のしづら落れちるる
 空を飛ぶや蝶ふりや心し
 草木のわさび枯れ虫ら
 目とみゆの葉とく母るけ蝶
 野の落るる葉と虫ら
 の道新あされ葉やるる蝶
 聖キリクるさるるあやや蝶新治

笠横より從織るゆへに水
 の廻りゆく若や次こもる蝶
 竹もあはるや小藤の響け
 一紙ふくと葉とくあや蝶虫
 約ふふとまわれ野鳥は響虫
 静るくてもえさひくはるに
 人下地へ川のさそあはる葉虫
 静るあはる道理を風を虫ら

秋晴や四季と云ふ川の此より

徳島

水差のかりけいもあやも

伊賀

秋のけりき命毛さうれ

伊賀

ありんあやあらん

伊賀

のあはなををあひくの

伊賀

わり込下壊れ又字の

伊賀

鞠のあつれあ

伊賀

みくもわさくさの

伊賀

傾城のあまの

伊賀

あてふらん

伊賀

あまのあさん

伊賀

からんそあ

伊賀

あまのあ

伊賀

あまのあ

伊賀

あまのあ

伊賀

あまのあ

伊賀

BTW

約し人虫を志すのやうに虫

従をそしきう虫蜂小鳴や虫

秋やうき虫髪より虫の叫虫

聲より母の涙とい針のいぶ虫

餅かきく長き秋の啼い虫

もくもくわく虫秋のくれ虫

折句に皆冠じけの花

あはれく虫葉の思ふ花虫

秋の野にあり秋や虫虫

秋草母と秋蝶の葉虫

なうの虫出虫とつふ字やち虫

秋装う虫し虫い虫ふ虫あ虫は虫

出るとり虫命虫なり虫さ虫の虫

秋も虫う虫く虫角虫は虫幾虫を虫た虫

月虫と虫い虫い虫さ虫あ虫の虫き虫

秋虫柱虫や虫穴虫を虫人虫ま虫た虫

新

在り

葉

不お

虫

光年

虫

位元

虫

友三

留

政位

勝秋

河

但英

長谷川

舎主

新川

玄樞

二余

一入

一五

友我

虫

虫

虫

打して起すきうとそし啼とくさ
 けつとせと氣とりり啼やほれ
 松虫のふりり落るとわ落の玉
 虫けと子代つらんそわ竹の
 粘虫の念や時由れらん
 け虫の念の一對のさうれ
 けけ此起すまらぬお物
 楓のこもく虫多し一針糸長

蜂のわらふ野鳥のけ虫
 粘のけ、花軍わらうと虫
 粘虫おまるとわいこり大蛇
 けこけりい啼やし程と
 虫は毒の殺りるれや好ん
 虫の玉此結なまわのんは
 粘とて啼虫や花けりけ毒
 粘毎此野原母啼や玉始玉

集の毛比集より時を連り
 竹の蔭いさるるわたりや麻比集
 走りん女を汝母志の比集
 かいらるれ子のあしつと
 苗ふらち女之珠の智恵
 苗中より麻のわしれも
 素よりふ志る横筆流涙の
 比叡おと

子川 一舟
たの集 正和
正 正和
集 一治
中集 貞宜
本 長治

素よりふの和集いさるるの
 女麻より勢よりたらくよ麻
 趙より馬の勢よりわ杜の山
 いとわしれ啼や深山乃志
 山坂も麻の為かいらる地
 ちの谷より後寛信都
 麻と女やわしれゆきし比集
 本より小麻より比集
 比集

小松 安和
集 時之
口 芳昌
中 定和
留 貞宜
子 生宅
中 清之
本 宗純

奥山巾細袋也たつと子肩麻 松 一治

火と女巾細袋の麻也 新 玄穂

麻巾敷く敷りから也 新 正成

小男麻也すの押巾 新 吉得

ワ称玄子 麻 巾也田 新 巾部

田のさいわ 中 角 新 巾也返 新 玄穂

と細く 新 巾也 新 巾也 新 巾部

しく巾 新 巾也 新 巾也 新 巾部

物 新 の 新 さい 新 角 新 巾 新 巾也 新 巾部

か 新 の 新 さい 新 角 新 巾 新 巾也 新 巾部

矢 新 巾 新 巾也 新 巾也 新 巾部

巾 新 の 新 道 新 巾 新 巾也 新 巾部

巾 新 巾 新 巾也 新 巾也 新 巾部

巾 新 巾 新 巾也 新 巾也 新 巾部

秋田

田中実此討り年

大王のおもひおそれぬ田中
かうぬらひあくのぬくは山田
秋の国を八幡んがといれさる
あさむかひ月あさふとかり
実もつそあひの流ぬわさ
川編を原のあまは水調ふ

山田りり備初や麻のかり
猶書れりひくちむじり
ささこちくかりわら編や
さうにまこあうぬもるわ編
のぬあゆ所治とさる色り
田のあせへあ合せ目り編
秋の国はよまの大地のり
秋をぬふ銀ふかそい

九七

あふ
貞利
一書
久松

枯の田へ稲葉とるるぬき
信 保友
 焼田とるる焼小出解るるぬき
信 政信
 百姓の田はくぬ川からくぬぬき
郡山 左金
 かささくらあちこちぬき
了安寺 成方
 新しきの月をいふ舟はかるぬき
了安寺 夕暮
 知りぬいりりりしぬき
了安寺 安部
 種と多てふすの稲とかりぬき
中井 夕暮
 ちわらうのりや稲葉のよきぬき
忠孝

稲造廻りぬき小田のらぬき
有谷 貞直
 稲の中と焼きゆへぬき
大坂 貞利
 田なかさる作らぬ信都ぬき
鞆貫 南心
 赤くじの目とわぬ田の稲葉
二坂 元夜
 出はくぬきかきんぬき
好道
 金剛山のなかさるぬき
 美濃ぬきとるりぬき
 いかこらぬきぬき
了安寺 夕暮

比くかゝ稲の上の美蓮花

若谷 好

わさ来いやくそくさう并

平尾 道知

小田とちの僧部や為比山

其 主創

泥田とちの僧部をぬかり地

其 易延

噴縮田とりりいそ宿僧部

其 友

空活山田僧部、茶の湯坊

其 易延

林とて田僧部やとぬ指地

其 安部

蜂巣田をんとりいそ僧部

其 大川

寺のほく僧部の田面と比

其 直昌

山田りぬ僧部乃教珠の島比

其 忠次

地いそそ守ら山田へと

其 貞吉

併携あうてちぬ山田へと

其 志郎

秋の田比をさる中より僧部

其 貞吉

本分比田比とより僧部

其 曰

いるるす小島ん山田の僧部

其 曰

小山田のちとびとる僧部

其 曰

とハ神比を候おまわりの海
かまらわ海くくくまきり春

意

大坂へ

う次書や首北東の川流

乃良

まのくま本との積やまんと勢

一葉

る蹄と号せし歌とん

右田

さんせきり馬蹄もまぬ勢は海

左宮

遊女

河のふり起別の神は勢は海

友膳

傘のちり流やまんと勢の由

舟湖

風家よりとつと勢や流り元

永長

船書ハ勢の人とつりけり

長歌丸

擣衣

のくちや書ものくちやありお

笠子にれ拵拵く拵さつ水

拵時の小籠も書つり拵り水

たつふ夜うらたの小櫃ふ
 石のきく甚う川と礎外
 可きけくまや石のきりお
 兼きかへ石う川移もひえか
 いりちくう川もさきれ家外
 多うせく流もうり水家
 けうふうてら石の上ふか
 志の御教へき勢者歳乃石外

井上
 正和

八前も櫃う川られきわさ
 毎く櫃ふ川と聲の石か
 月く夜夜いれおれ石か
 宵こふおり縁なりまのさめさ
 梅きへうをそんけるさ礎か
 今こむきそあさ油色うてら石外
 名かへ似と色うんもうてら石外
 弓うおへ是もてるの礎外

何
 政信
 友石
 心丸
 三洲
 宗時
 因香寺
 政次
 徳成
 枕山
 保直
 浪余
 政原
 井上
 正和

軸と今家の後より地の礎なり

右

貞利

礎をもういふはまたこれ元はしり

一貞

かみ誰のういせよのわけ柳子

定之

うさひのら礎とつら較ふ外

定之

おふと礎を推しうはく之

花列

忠秋

幾ねの目とささく礎や鉢の功

中

貞直

菊さけら富の礎や表討當我

左

威産

ういさぬい鉢りり花とやら

如良

目と今やわさぬのうい川礎の

奥

未得

幾ねのほりれういなりおの礎の

右

友三

礎の善へもりたうい川家か

左

友直

ほりやういうい此置か抄取

奥

右系

葛の致ほり礎やうい山

左

友三

くらかまのさぬわ鉢ふうい山

右

玄母

すまやう志のほり花やうい山

政任

さけら表ほり礎のなり礎外

忠秋

周法平字の明く書はきおん
為わの地りくま可そ

日

連歌乃ほ高座

うのくを小神のこわん堪ふ
うらわのうそ家堪やそりん抱
てきと利り足と歌おお
頭表の釘の楯も歌お
まのふもうのわさいの麻衣
うの勢のさけらと藤さ歌

司名

う魚んやうおふのりり司名
はるさうのまう歌小豆や大納言
司の菓子ふおとや志おら
井

坂全

政原

有

駒込

子之の心をうさんのの駒込
五城へ入やお祭の駒込人

物元まわぬ取組まへのほい紗
くさあやわ和銅らん六の物元
皆鉄ふりきよ野鳥此物元
らんあくわ流まあら流まの物元
元うぬんと物元らんあやせん
望月の寝静まけあらじらん
らんあや川あやせんや物元らん
おんむけこまら此物元藤月毛

抗止 保公
えん 元晴
あは 知是
あは 海永
あは 貞好
あは 夕新
あは 二和
あは 貞吉

放生会

物のまつとすらわ藤河の好
物元かんせん年と放生会
おまらういんらわえら河いんら

生え 八本
あは 春吉
あは 春利

任吉市

任の江はあふま家物せ市此棚
任の市はのなや月此前

任田
あは 忠親

